コンタクト・ブレイブス

野菊風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンタクト・ブレイブス

【Ｎコード】
Ｎ８６８１Ｙ

【作者名】
野菊風雅

【あらすじ】
完全体感型のＭＭＯ。
それは世界を繋ぎ、世界中の人々はそのゲームに熱狂していた。
矢野弘輝の物語が仮想現実『インティール』で始まる。
けれど、その物語はゲームでは終わらない！？
新ゲームアクションノベルスタート！

第一話　ニューゲーム（前書き）

素人ですが、どうぞよろしくお願いします。
誤字・脱字ありましたら報告お願いします。

第一話　ニューゲーム

―――生体接続が完了しました―――

無機質な音声が頭に響いてくる。

―――神経系の同調開始―――

意識が切り替わっていく感じがする。少し気持ちが悪い。

―――同調が完了しました―――

意識の変化が終わる。それでもまだ気持ちが悪いが。

―――生体認証、確認。ユーザーネーム『ヤノ・コウキ』―――

――――――――――――ログインしますか？――――――――――――――――――

「ああ」

宣言した瞬間、世界が一変する。

閉じていた目を開ける。

そこは自室のベッドの上だった。

それだけならば別段珍しいことではない。

だが、ここは実は自室ではない。しかし、自室である。

その可笑しなロジックを解決するには、この世界について理解する必要がある。

とある一本のゲームが開発された。

完全体感型のＭＭＯ。

ありとあらゆるゲーム会社が一丸となり作り上げた奇跡のゲーム。

世界はそのゲームの発表に驚愕した。

今まで画面の中だけだった出来事を現実と同じように体感できる。

今までのゲームではできない自由なアクションを行うことができる。
「二次元と三次元とを区別する時代は終わった」と言った者までいる。
仮想現実の世界『インティール』を舞台とした、ほぼノージャンルとも言える奇作。
ＲＰＧであり、アクションであり、シミュレーションであり、ＮＰＣとの恋愛までできる。
「実生活が蔑ろになり世の中が回らなくなる」とも一部からは言われている。
だが、それでも多くのユーザーから支持され、ゲームは今も続いている。

ここは本当の自室ではないが、ゲーム内では自室だ。
弘輝はベッドから降り、部屋を見回す。
特にこれといった特徴のない部屋。物は何も置かれていない。
……ただ家具に費やすほど手持ちがないだけなのだが。
駆け出しのうちはそんなものだと自分に言い聞かせる。少し泣きたくなった。
「だったら、早く一人前にならないとな！」
突き動かされるように自室から出る。
居住区を抜け、スペースコロニーの中央区画に出る。
クエストを一刻も早く受けたい弘輝は、扉が開いた瞬間に駆け出す。
「うおっ！」
「ふぇ？」
ドンッ
扉から出た瞬間に人にぶつかる。さいさきが悪すぎるだろ。
「いつつつ……」
とりあえず体を起こす。
目の前にいたのは小柄な少女だった。

ふわふわとした茶髪に、可愛らしい顔立ち。
華奢そうな体をコロニー警備隊訓練生の制服に包んでいる。そのアンバランスさが少女の愛嬌を引き立てる。
思わず見入ってしまった。
「いたたた……ふぇ？」
少女が起き、一瞬の沈黙が流れる。
とりあえず今の状況を把握しよう。
可愛らしい少女、男、馬乗り、凝視。さて、ここから出される結論は？
「へ、へ、ヘンターーーイ！！！！！」
ですよねー。
……。
……ですよね、じゃねえよ！どうすんだよこの状況！
周りの人々が訝しげな目を向ける。
このままこの場にいてはいけない。全本能が告げてくる！
けど、どうすれば？
少女は弘輝を振り落とそうともがく。周りの視線もきつくなってくる。
「と、とりあえずこっちに来い！」
少女の腕を掴み走り出す。
「キャーーーー！イヤーーーー！！」
……この行動は間違いだったと後悔している。もう、本当に……。

コロニー内の喫茶店で少女のことを説得する。
とてつもなく疲れた。これならその場で弁明した方が楽だった。
いや、普通はそうするか……。
少女はさっきまでの取り乱しようとは一変、とても気弱そうだ。
まだ疑いの目を向けてはいるが。
「あ、あのさ」
「は、はいっ」

少女はビクッとなり、おずおずとこちらを向く。
「さっきは本当にゴメンっ！」
もう一度全身全霊で謝る。女の子に対して失礼なことをしたのだ。この程度で許されるとは思っていない。
「そんなに頭を下げないでください。全然気にしてませんから」
そうは言うものの、目はやはりこちらを信じてはいない。
「よう弘輝。女の子を口説いてんのか？俺にも紹介してくれよ。いや、まじでお願いだから」
黒のローブを纏ったエルフの青年が、なんか残念な感じで話しかけてくる。
「いやー、待ち合わせの場所にいないからどうしたのかと思ったけど、まさか誑しこんでるとはな」
「そんなことしてねえよ」
これがどう見たら誑しているように見えるんだろうか。
「あ、あなたは？」
少女が突然現れたエルフの青年に戸惑ったように聞く。
「こいつは俺の、なんて言うか、腐れ縁の友人の田沼正志（たぬまま さし）だ」
「ちっちっち。人の名前を間違えて教えちゃダメだぜ、弘輝」
正志が人の紹介にいちゃもんをつける。何も間違えていないと思うんだが。
正志は自信満々に言い放つ。
「我が名はシュヴァーネル・アルタロ……」
「正志でいいと思うぞ」
そういえばこいつのユーザーネームは長ったらしかったな、と思いつつ適当に流す。
そんな長い名前を考えたことにだけは正直に感心する。覚え辛いことこの上ないが。
「えーと、よろしくお願いします。正志さん」
正志が睨んでくる。そんなに気に入ってたのか。
「うん、よろしく。それで、君の名前は？」

正志が少女に尋ねる。
俺も聞きたかったが、聞くのを憚られたことだ。
「わたしは、えーと、な、」
「「な？」」
二人して聞き返してしまう。
少女は怯えたように、いや恥ずかしそうに？身を引く。
「な、なあたんって、い、いいます……」
少女――なあたんの顔が恥ずかさで赤く染まる。
そりゃ自己紹介で『なあたん』と言うのは恥ずかしいと思う。
「なあたんちゃんか。いい名前だね！よろしく」
正志がなあたんに手を差し出す。彼女はそれを少し警戒して、握手をする。
「俺は弘輝。矢野弘輝。よろしく、なあたんさん」
俺も一応自己紹介しておく。
「お前まだ自己紹介してなかったの？」
「するような状況じゃなかっただけだ」
「と言いますと？」
「それは……」
説明するのか？あのことを？
正志が興味津津といった目で見つめてくる。男がそんな目をしてもキモいだけだ。
「なあ、教えてくれよ。なあ、なあ」
正志がすり寄ってくる。キモい。
「ああ、もう分かったよ。話せばいいんだろ。話せば！」
そのまま勢いで話してしまった。
正志がわなわな震えている。なあたんはもう一度思い出したのか恥ずかしそうに顔を伏せる。
耐えられなくなったのか、正志が爆発する。
「なんだよ、そのＬＳ（ラッキースケベ）！どこぞのギャルゲの主人公だよ！」
イケメンからギャルゲの主人公とか言われる日が来るとは思って

なかった。そのイケメンが正志でなければもっとよかった。
「ああ、俺にも来ないかなＬＳ。ああ、来ないかなあ」
正志が恨めしそうにこちらを見ながら、呪詛のように言う。
「そうは言うがな、実際に遭遇すると大変なんだぞ」
「すみません、すみません」
「いや、なあたんさんは悪くないから」
謝ってくる彼女を必死に宥める。
「俺の前でいちゃいちゃするなあ！」
正志が今にも暴れだしそうだ。このまま放っておいたら大変なことになる。
「お、落ち着けよ正志」
「これが落ち着いて……」

ウーウーウー緊急クエスト発生。緊急クエスト発生。繰り返します。緊急……

警告音と緊急クエストを知らせる放送が流れる。
「え？え？緊急クエスト！？うおー！始めてだよ、こんなこと。すげーワクワクする！」
正志が興奮した声で捲し立てる。
「じゃあクエストルームに行くか。なあたんさんはどうする？」
なあたんさんは戸惑った顔をし、少し考えた後、
「わ、わたしも行きます」
弱弱しくだが答えてくれる。
弘輝達は緊急クエストを受けるために喫茶店をあとにした。

第一話　ニューゲーム（後書き）

新連載！
いや、前シリーズ（三話しか書いてませんが）は震災後、執筆がストップしてしまい、高校入学後は忙しくて書けず、設定が全部吹っ飛んでしまいました。

今回は完結できるようにがんばります！
自分は素人なのでアドバイスをお願いします。

目標は週一更新です！

第二話　ファーストオーダー（前書き）

誤字・脱字の報告お願いします。
アドバイスをぜひください！

第二話　ファーストオーダー

「結構集まってるなあ」
正志の言う通り、クエストルームには、緊急クエストの内容を知るために多くの人が集まっていた。
弘輝達が到着したあとすぐに、大型モニターから放送が流れ出す。
「今回の緊急クエストの説明を開始します。
先ほど食料貯蔵プラントへ、謎の物体の衝突が確認されました。
プラントに何かがあっては、コロニーへの食糧の補給が一時的に不可能になってしまいます。
ですから、みなさんにはプラントの調査と取り残された者の救助、そして可能であれば、事態の解決を依頼します」
調査と救助、これならば敵から逃げ回れば俺でもクリアできそうだ。事態の解決はこの際諦めてもいいし、もっとレベルの高い人に頼んでもいい。
「これ受けるか？これならクリアできるかもしれないぞ」
弘輝の発言に、正志はう～んと悩んだ後に思案顔で答える。
「そうだなあ……。これなら他のクエストを受けた方が経験値的には良さそうだなあ」
正志はあまり乗り気ではないらしい。
確かに経験値を考えれば、殲滅系や討伐系がいいかもしれない。
「まだ続きがあるみたいですよ」
なあたんさんが、控え目に教えてくれる。
クエストの情報が更に放送される。
「なお、このクエストはアンノウンクエストとなります。受注する方は十分に注意してください。
受注は先着八名までとなります。受付時間は今から三分です」
放送が終了し、周囲がさっきまでとは違い興奮したような雰囲気に包まれる。

「あの、どうしてみなさんはこんなに興奮してるんでしょう？それにアンノウンクエストって……」
「俺もアンノウンクエスト、ってのが分からないんだけど」
弘輝となあたんが正志に聞く。聞かれた正志は得意気だ。
「それでは正志さんが、お二人に教えて差し上げましょう」
なんか正志が輝いて見えた。
「アンノウンクエストっていうのは、その名の通り詳細不明のクエストのことで、出現モンスターの種類やレベル、手に入るアイテムが全然分からないんだ。だから、とてもレア度の高いアイテムが簡単に手に入ったり、一攫千金が狙えたりするんだ。しかも、中にはアンノウンクエスト限定のアイテムもあるんだよ」
「おおー」
言い終えた正志は、キャラの顔と釣り合うだけの雰囲気を纏っていた。
ローブ、エルフの青年、授業。なんか一つのキャラが完成したようだ。
「ただ、手に入る物が労力に見合わないことも多いんだけどね」
「まあ、そういうこともある。……ってあんたは、いえ、あなた様はどなたでしょうか？」
正志の説明に長身の女性が説明を付け加える。
弘輝は女性に心当たりはない。なあたんのことも見るが、彼女も知り合いではないらしい。
「あたし？あたしは椿。まあ、ただのお節介な先輩だよ」
「はあ」
椿と名乗った女性は大人びた女性だった。地味ではない、しかし派手すぎないコートを着ている。いや、着こなしている。
正志なんかは鼻の下が伸びっ放しだ。顔がイケメンだから逆に痛い。
なあたんに服を少し強く引っ張られる。どうしたんだろうか。
「あたしはこれ受けようと思うんだけど、あんた達は？」

「受けます！よっしゃ、みなぎってきた！」
正志は即答だった。すごいオーラだ、邪念まみれの。
なあたんは迷っているらしい。
「そこの二人はどうするんだい？」
椿がもう一度聞いてくる。
正志はなあたんには期待の目を、俺には、友人として来て欲しい、が、来られると困るという目で見てくる。というか、そんな素直に感情を顔に出すな。
「俺も受けます。なあたんさんは？」
「わ、わたしは……」
なあたんは少し考えた後に、決心した顔で言う。
「わたしも行かせてください！」
「じゃあ、受注しようか」
四人はカウンターに向かう。
カウンターでは、人形のような少女が受付をしていた。
「緊急クエストを受けますか？それとも、通常クエストですか？」
受付に、感情の籠ってない声で聞かれる。
「緊急クエストをこの四人で受けるよ」
「了解しました。それでは、アカウントカードをこちらに」
アカウントカード――プロフィールや戦跡などを記した身分証明書を渡す。
「受注完了。それではしばらくお待ちください」
受付を後にし、適当な席に着くことにする。
その途中で正志に話しかけられる。
「なあ、受付のリセプさんって素敵だと思わないか？」
「受付のＮＰＣってそんな名前だったのか。いや、まあそうだな。たしかに可愛いな。けど、ＮＰＣだぞ」
「なに言ってんだ！このゲームはＮＰＣとの恋愛も認められてるんだぞ！！」
「まあそうだけど……」

「俺は絶対リセプさんをオトす！！」
こいつのこと置いて行っていいかな。
いや、そういう楽しみ方もいいとは思うが、こう、隣にはいたくないな、そういうやつと。
四人掛けのテーブルに着く。
「受注人数残り二名です」
リセプの声が聞こえる。どうやら、先に二名受注していたらしい。どんな人物だろうか。
「そうだ。まだ三人の名前を聞いてなかったね」
椿が質問する。
確かにこれから同じクエストを受けるのだから、自己紹介をしておくべきだろう。
「私奴（わたくしめ）の名前はシュヴァーネル・アルタロン・ラ・フォングラス・ドリュッセンと申します。以後お見知りおきを」
ここぞとばかりに正志が自己紹介する。今回は最後まで言わせる。
しかし、椿は困った顔をしていた。やっぱり長すぎだろ、その名前。
「あー、どう呼ぼうか」
「俺達は正志って呼んでるんで、それでいいと思いますよ」
正志の恨みは買ったかもしれないが、仕方ないことだろ。アルタロンあたりで止めておけばよかったのに。
「俺は弘輝っていいます。よろしくお願いします」
無難に済ませることにする。
正志を反面教師にして。
「わ、わたしは……えーっと、なあ、なあたんっていいま、す」
なあたんはすごく恥ずかしそうだ。俺だったら恥ずかしさで死んでいただろう。
というか、死んでしまうんじゃないかって位に顔が赤いぞ。
ふと思ったことを椿に聞いてみる。
「椿さんって、クラスはなんですか？」

クラス、それが分かればその人の戦い方が大体分かり、作戦が立てやすくなる。
作戦を立てられる程、経験を積んでいないが念のため。
「あたしのクラスはヘビィシューターだよ」
「ほ、本当ですか！そんな人に手伝ってもらえるなんて光栄です！」
ヘビィシューターとは、重火器を専門とする上位クラスだ。重火器以外の倍率が低く、扱いこなすのが難しいクラスの一つである。
「そんなことはないよ。あたしはただ遊んでたらこうなっただけさ」
椿はそれでも奢った感じはしない。
純粋にすごいと思う。この人と知り合いになれてよかった。
「いえいえ、とても尊敬します。ちなみに私は白魔術師です。なあたんちゃんは」
「狩人です」
小声で答えるなあたん。
狩人は弓や短剣、トラップを得意とする基本クラスだ。攻撃と支援を両立する、パーティに一人は欲しいクラスだ。
白魔術師は回復と水、風、光系魔法を得意とする基本クラスだ。
「弘輝さんはなんですか？」
「俺はソルジャーだよ」
苦手武器が無く、強いて言えば軽量武器が得意な基本クラス。若干回避力も高い。
「これで全員のクラスが分かったわけだ」
「時間となりました。緊急クエスト参加者は出撃ゲートに来てください」
話してる内に三分たったらしい。
「それじゃあ行こうか」
「どこへでもついて行きます！」
「はい」
「わかりました」
弘輝達四人は出撃ゲートへ向かった。

ゲートには弘輝達以外に三人いた。どうやらあの後に一人受注したらしい。
「さあ、やったるぜ！待ってろよレアアイテム！」
一人はなんか煩い犬の獣人だったが、弱そうな感じはしなかった。
「どうしよう隆弘。私、コワーい」
「だいじょうぶさ、博美。僕が守るよ」
バカップルはパス。
ゲートを抜けると格好が変化する。
弘輝は体の所々にプロテクターが付けられ、背中に長剣、腰にハンドガンが装備される。
正志はローブに青白いラインが走り、魔道書を持っている。
なあたんは弓と盾を装備し、腰に矢筒と短剣を付けている。
椿はコートが無くなり、その下の黒い水着姿が晒される。その上から様々な弾種のマガジンベルトを装備し、手にはヘビィガトリング砲、肩にはライフル、腰にはショットガン、所々に手榴弾を装備した、露出が多いんだか少ないんだか分からない装備だった。
獣人の人は大剣とマシンガンを持ち、バリアバッチを付けている。
バカップルはペアルックの片手剣、ハンドガンだった。
それぞれの情報が表示される。

エントリーリスト
Ｌｖ．２４　佐々木隆弘　戦士３８
Ｌｖ．２３　谷藤博美　戦士３７
Ｌｖ．４８　椿＝紅龍（べにりゅう）　ヘビィガンナー６４
Ｌｖ．１３　シュヴァーネル・アルタロン・ラ・フォングラス・ドリュッセン　白魔術師１３
Ｌｖ．１６　ヤノ・コウキ　ソルジャー２０
Ｌｖ．９　なあたん　狩人７
Ｌｖ．８５　ガーベル　クラッシャー８３

no entry

「椿様は『紅龍一族』だったんですか！？」
正志が衝撃を受けていた。
「まあ、その話は後でね」
椿さんはそれほ軽く流した。
正志の反応からは、そんな軽いことじゃないように感じられたが。

――――――食糧プラントに転送します――――――
食糧プラントの入り口についた。
入り口は禍々しく黒くなっており、中で怒っていることの異常性を物語っていた。

第二話　ファーストオーダー（後書き）

二話目にして心が折れそうです……。
まあ、楽しいからいいんですけどね。

ちょっとした解説
この世界ではレベルに上限がありません。また、クラスレベルは１００までです。クラスの後に書いてある数字がそれです。

質問・アドバイス大歓迎です。
次回は戦闘描写がある予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8681y/

コンタクト・ブレイブス

2011年11月27日00時55分発行